『松江竹枝』訳注（三）

要木純一

竹（タケ）子　垣本阿品　舞妓　　竹子　垣本阿品　舞妓

（35）敲鼓淵淵飄舞裙　　鼓を敲くこと　淵淵として　舞裙を飄す

風狂雨劇耐辛勤　　風狂　雨劇　辛勤に耐う

看他紅紫紛紜裏　　看よ他の　紅紫　紛紜の裏

瀟洒清姿抽此君　　瀟洒たる　清姿　此君を抽くを

「舞妓」は、おどり専門の芸者であろう。まいこ。「声妓」との関係はよく知らない。白居易『西楼雪を喜びて宴を命ず』「光は舞妓を迎えて動く」。

太鼓をどんどんならす中、舞妓の裳裾がひらひらする。この妓女は、狂ったように吹く嵐のような苦労にも耐えてきたのだ。（別解。荒れ狂う風雨の如き激しいおどりにもたえる体のしなやかさよ）ほら、いうなれば、赤や紫、色とりどりの花がやたらめたらに咲いている中に、すっきりとした、すらっとした姿がひときわぬきんでる竹のようであるよ、この子は。

起句。「敲鼓」の語は見慣れないが、用例がないわけではない。牛殳『琵琶行』「満城鼓を敲いて声鏘鏘」。かなり激しい打ち方か。竹を打ったときのような。「淵淵」は太鼓の音。『詩経』小雅・采芑「鼓を伐つこと淵淵たり」。「舞裙」は妓女の服装、晁朴之『南歌子』「舞裙歌扇を喚取す」。承句。「風狂雨劇」、李清照『満庭芳』「風狂雨驟を怕れず」。「辛勤」、韓愈『児に示す』「辛勤三十年」。転句。「看他」、ごらんと注意を喚起する感じ。高輦『棊』「看よ他の一局を終えて、少

年の頭を白却するを」。「紅紫」、『論語』郷党「紅紫は以て褻服と為さず」。紅紫は間色で、女性の服に似ているので、普段着にしなかったという。（朱子注）裏返せば、女性の服にふさわしい色。竹子のまわりで芸者達が色とりどりの服をきてあでやかさを競っているのだろう。一方、韓愈『晩春』「百般の紅紫芳菲を鬪わす」のごとく、色とりどりの花々をも表す。それならば、竹のまわりを花が取り巻いていること。以上の両方を掛けている。「紛紜」、「紛云」にも作る。ごちゃごちゃして多い様をしめす畳韻語。司馬相如『蜀の父老を難ずる文』「威武紛云たり」。班固『東都賦』「万騎紛紜たり」。「紛紜」は形容詞なので「裏」をつけるのはおかしい。「成功のうちに」を「成功裏」などというのと同様、日本語的発想か。結句。「瀟洒」は、「瀟灑」にも作る。李白『王右軍』「瀟灑として風塵に在り」。杜甫『飲中八仙歌』「宗之は瀟灑たる美少年」。世俗を離れた、さっぱりとした気風。「清姿」、権徳輿『故李処士を祭る文』「澹然たる清姿」。「此君」、『晋書』王徽之伝に竹を愛した徽之が竹を指して「何ぞ一日も此の君無かる可けん耶」といったという故事があり、「此君」は後に竹の代名詞となった。岑参『范公叢竹歌』「此君根を託して幸いに地を得たり」。そして、「竹」は「抽」んずるもの。『興化池亭に宴して、白二十二の東帰するを送る。聯句」の張籍の部分「岸蔭に新たに竹を抽んず」。竹子が妓女のなかで秀でることを、竹が雑花の中ですっくと独り伸びていることに掛けて詠んでいる。

小升　山本充女

(36) 鬱居十載独傷神
夜夜巫山入夢頻
未語真情我先識
性来矜重属斯人

小升　山本充女
鬱居すること　十載　独り傷神す
夜夜　巫山　夢に入ること頻りなり
未だ　真情を　語らざるに　我先ず識る
性来　矜重して　斯の人に属む

この妓女がなぜ「小升」とつけられたかはともかく、その源氏名を詠み込んだと思われるこの詩を鑑賞する上では、「小升」は、大森惟中の評に明らかなように、酒を酌む小型の升と解するべきであろう。

鬱々と十年間、独り悩んできたあなた。毎夜、巫山の神女の如き、かつての恋人が何遍も夢に現れるのね。本当のお気持ちをおっしゃらないでも、こちらはもうわかっておりますわ。私は性分として、こんな人をほっとけなくて、お酒をついつい勧めてしまうんですのよ。

起句。「鬱居」、見慣れぬ語だが、『漢書』韓信伝「安くんぞ能く鬱鬱として久しく此に居らん乎」をつづめたのであろう。「居」の字、原文は「尸」に「立」の形に作る。異体字の一つ。「独傷神」の「神」は精神。蘇軾『獄中子由に寄す』二首其一「他年の夜雨独り神を傷つく」。承句。「巫山」は、楚の懐王が夢で神女と交わった故事。（宋玉『高唐賦』）。既出。「入夢頻」、貫休『匡山紀公に寄す』「相思夢に入ること頻りなり」。転句は、妓女との交情を詠んだとおぼしき、李白『相逢行』「未だ語らざるも心を知る可し」を意識しているであろう。「我先識」、南宋曹勛『山居雑詩』「村香我先ず識る」。この句、「未だ語らざるも真情は我先ず識る」と訓ずるべきか。結句。「性来」、熟語としてあまり見ない。日本語では「生来」（しょうらい・せいらい）と同様に使うらしい。（『国』）。「矜重」は、本来荘重の意。動詞として用いれば荘重とみなす、すなわちうやまうの意となる。平仄の関係で「敬重」（けいちょう・きょうちょう）の代わりに用いたか。沈約『宋書』「深く相い矜重す」。「属」は酒などを注いですすめること。（21）に既出。但し、「属斯人」の用例を見る限りは、「この人に所属する」の意が殆どで、ここも、生来の立派さがこの人の持ち前だ等の解釈も考えられそうだが、やはり、「小升」の源氏名に関連させるべきであろう。

大森惟中の評。

矜重傷神人、宜傾小升酒、一掃鬱愁。　傷神の人を矜重せよ、宜しく小升酒を傾け、鬱愁を一掃すべし。

そうそう、悩み多き人は大切にしなくっちゃ。小升の勧める小升を傾けて、その酒で、鬱々とした気持ちを、すっぱりと晴らしなさい。「鬱愁」、韓愈等『遠遊聯句』のうち孟郊の詠んだ部分「中に鬱鬱たる愁いを結ぶ」。蘇軾は『洞庭春色』で酒について「亦た掃愁帚と号す」という。

この詩、いくつかの語の意味が確定できず、解釈は武断に過ぎるかも知れぬ。

市吉（イチヨシ）　川上唯女　出雲杵築之産　　市吉　川上唯女　出雲杵築之産

自註　市吉曽与画工金山鴎隣互約伉儷、情交親密、故及。　自註　市吉は曽て画工金山鴎隣と互いに伉儷を約し、情交親密なり、故に及ぶ。

（37）一日不看奈病癯　　一日　看ざれば　癯を病むを奈んせん
宵宵只有苦中娯　　宵宵　只だ　苦中の娯しみ　有るのみ
阿郎舐筆画何状　　阿郎　筆を舐め　何の状をか画く
写出鴛鴦比翼圖　　写し出す　鴛鴦　比翼の圖

大森惟中に従って、原文「圓」を「圖」に改める。単なる誤字。

自註。市吉はそのかみ絵描きの金山鴎隣とちぎりを結び、仲むつまじかったので、この詩で言及している。「伉儷」は匹敵するペアということから、夫婦関係を指す。『春秋左氏伝』昭公二年「伉儷に非ざる也」。「情交」は交遊。謝霊運『山居賦』「情交の永く絶ゆるを顧みる」。日本では専ら男女の愛を指す。「親密」、嵇康『家誡』「当に親密を極むべからず」。「故及」は既述。金山鴎麟に関する詳細は不明。

一日あなたに会わないと、私のこのやせ衰えた体が支えられない。苦しい中、毎晩、あなたと会うのだけが楽しみ。あなたは、筆をなめて、何を描いているのかしら。ああ、オシドリが翼を交わし合っているのをありありと写生している。うれしいわ。

起句。「一日不看」、『詩経』王風・采葛「一日見ざれば、三月の如し兮」。平仄の関係で「見」を「看」にした。「奈」は、「奈何」と同じ。「どうするか」、反語的に用いる。杜甫『月』「天寒くして九秋を奈かんせん」。また、「耐」に通ずる。その場合も「たえんや」と反語的に読み、「どうしようもない」という大意に変わりない。「病癯」、張耒『李深之を祭る文』「多く癯を病む」。「病躯」のつもりかも知れぬ。承句。「夜夜」というのを、平仄の関係で「宵宵」を用いた。詩語としてはあまり用いない。日本語の「よいよい」からか。「苦中娯」、雪竇『頌古集』「苦中の楽、楽中の苦」。転句。「阿郎」は前出。「舐筆」、『荘子』知北遊「筆を舐めて墨を和す」。「何状」、元結『窊樽銘』「片石何の状ぞ」。結句。「写

出」、孟郊『汝州南潭陸中丞公平に陪す』「写し出す青天心」。「鴛鴦比翼」、傅玄『青青河辺草篇』「君を夢みれば鴛鴦の如く、翼を比べて雲間に翔る」。

絲児（イトジ）

（38）朱唇舐筆写相思　　朱唇　筆を舐め　相思を写す
　　餘墨又描新月眉　　餘墨　又描く　新月の眉
　　児繋色絲牽万客　　児は　色絲を　繋ぎて　万客を牽く
　　絲児真箇是情児　　絲児は　真箇に　是れ情児

紅い唇で筆をなめつつ、恋文を書き、さらに、余った墨で、新月状の眉を描く。絲児は、蜘蛛の妖精の如く五色の色糸で、沢山の客を引っかける。絲児よ、お前は本当に情の濃い女じゃのう。

起句。「朱唇」、宋玉『神女賦』「朱唇的かにして其れ丹の若し」。「舐筆」は、前の詩参照。「写相思」、李商隠『碧城』其三「収めて鳳紙を将て相思を写す」。承句。「餘墨」、欧陽修『曼卿を哭す』「餘墨潤いて枯れず」。「新月眉」、『雍熙楽府』無名氏『点絳唇』「黛烟もて描く新月の眉」。妓女が黛で恋文を書くような習慣があるのだろうか。不詳。転句。「色糸」といえば、『世説新語』捷悟篇の故事。孝女曹娥碑の裏に「黄絹幼婦」と謎のことばが書いてあるのを、曹操と楊修が解いて「色糸女子」すなわち「絶好」（絶えて好し）の二字が隠されていることを示した。ここも絲児のきりょうをたたえる気持ちが隠されていると思われるが、大森惟中は「児繋色絲」に朱を入れて、「嬌態纏綿」に変えよと勧める。結句の『絲』字と重複するのを避けるためか。また、妓女を「蜘蛛の女怪」と見立てたことが、下の「牽」字で充分にわかるので、それ以上にあからさまにする必要がないと判断したか。「纏綿」の二字は、本来糸の繊維が長く伸びる様に対する形容であったのを、情がまとわりつくように深い意に使うようになったので、ここにぴったりの語だと考えたのかも知れない。「嬌態」、王維『西施詠』「君寵すれば嬌態を益す」。「纏綿」、李白『相逢行』「纏綿として会ず時有るべ

し」。「牽万客」、白居易『盧秘書の夏日新たに竹を栽うるに題す。二十韻』「勾牽す酒客の歓」。「三千客」は詩文にしばしば出現するが、「万客」は余りいわないようである。結句は、俗語の「情絲」が男女間の愛情を指すのを意識するだろう。孔尚任『桃花扇・選優』「今日に到りて情絲は割断し、芳草は天涯なり」。「真箇」は「真」を二字に伸ばした俗語、「箇」は意味のない助字。韓愈『盆池』五首其一「老翁は真箇に童児に似たり」。「情児」は、見慣れぬ語だが、「薄情児」（孫光憲『南歌子』「五陵の狂蕩の薄情児に似ざれ」）等に対して、情け深い熱情的な人を指すには違いあるまい。

大森惟中の評。

蜘蛛女怪、応避三舎。　　蜘蛛の女怪、応に三舎を避くべし。

蜘蛛の妖女、きっとみんな触らぬ神にたたり無しとばかりに遠巻きにしているだろうな。「蜘蛛の女怪」といえば、『西遊記』第七十二回、七十三回に現れる盤絲洞に巣くう七匹の蜘蛛の化身。「女怪」の語も見られる。また、歌舞伎の『土蜘蛛』等も意識するか。「避三舎」は、軍隊が三日分の行程だけ退くこと。『春秋左氏伝』僖公二十三年「其の君を避くること三舎」。もとの故事は、晋の重耳が、楚に対して、かつての約束を守ったことによるのであるが、日本では強大な相手を恐れて尻込みをする意に転じて用いる。「応」は、「きっと・・・にちがいない」の意だが、「須」（すべからく・・・すべし。・・・しなくてはならない）や「当」（まさに・・・すべし。当然・・・すべきだ）のつもりで用いているのかも知れない。

綾子　広部瀧女

自註　以古川柳為一篇。

綾子　広部瀧女

自註　古川柳を以て一篇と為す。

(39) 阿爺一去奈慈親　　阿爺　一たび去りて　慈親を奈んせん
菽水頻愁逼赤貧　　菽水　頻りに愁う　赤貧に逼らるるを
恨殺佳人多薄命　　恨殺す　佳人　薄命多きを
綾羅錦繡却纏身　　綾羅　錦繡　却って身に纏う

自註に古川柳を下敷きにして、この一篇を作ったというのだが、その古川柳が、何を指すか、未詳。華美な服で着飾った妓女が、実はもっとも生活に窮しているという裏腹の悲哀を詠んだ川柳と思われるが、ぴったりのものが見つからない。「木綿着て世のために織る綾錦」(『二葉之松』)は、境地は同じかも知れぬが、少しずれている。博雅の示教を俟つ。

おとっつぁんが死んで、のこされたおっかさんを養うすべがなく、貧乏のため、最低限の食事にさえ事欠く有様に、日夜苦しんでおります。ああ悔しくってたまらない、芸者ってなんて不幸なの。そんな私が豪華なあやにしきを身にまとって、遊廓に出るとは皮肉な話。

起句。「阿爺」は父。古楽府の『木蘭詩』「阿爺大兄無し」。「一去」、陶潜『園田の居に帰る』六首其一「一たび去りて三十年」。「一・・・」は「・・・してから」と後に続く言い方。「奈」は既出。「慈親」は、もともと父母両親を指すようだが、厳父に対して、慈愛に満ちた母を主に指すようになった。『呂氏春秋』「慈親を得るが如し」。杜甫『陽城郡王太婦人の恩命を賀し鄧国太婦人を賀し奉る』「号を錫りて慈親に載す」。承句。「菽水」は豆と水だけの粗末な食事。清貧な生活のさま。『礼記・檀弓』「菽を啜り水を飲み、其の歓を尽くせば、斯を之孝と謂う」。「頻愁」、竇鞏『早秋江行』「頻りに愁えて家に到らんと欲す」。「逼」は、接近する、おどす等の意味が中心で、日本語の「逼迫」のように、金繰りに困る意に用いるのは少ないようである。李嘉裕『常州の韋郎中舟を泛べて餞らる』「岸に逼りて芳草に随う」。桓温『譙元彦を薦むる表』「姦威仍りに逼る」。「赤貧」の「赤」は素っ裸の感じ。『南史』臨汝侯坦之伝「検の家は赤貧たり」。転句は、蘇軾『薄命佳人』「古え自り佳人は薄命多し」をほぼそのまま用いる。「恨殺」、「殺」は強意。楊万里『午に横林を過ぎて恵山を回望す』「恨殺す恵山尋ぬるも見えざるを」。結句。「綾羅錦繡」は、あやぎぬ、うすぎぬ、にしき、刺繍した絹織物。要するに贅沢で美しい着物。『小学』実明倫「綾羅錦繡を用いず」。「纏」を、服をまとう、身につけるという意で用いることは「纏頭」等を除いて少ない。むしろ、不幸が身にまとわりつく場合によく用いられる。杜甫『厳二の帰りて礼を奉ると別る』「将に老いんとして病は身に纏う」。

亀二　舟引充女

(40) 奇遇一宵話情状
蓬莱夢穏閨幃帳
假将其類作相求
果是阿郎名六蔵

亀二　舟引充女
奇遇　一宵　情状を話す
蓬莱　夢穏やかなり　閨の幃帳
假し　其の類を　将て　相い求むるを作さば
果して是れ　阿郎は　六蔵と名づくか

この詩、他と違って、仄声韻（去声二十三漾）の拗体。平仄は一部を除いて規則通り。

思いもかけず男に出くわして、一晩これまでの身の上を語り明かす。仙界に遊ぶが如き夢を見て、二人して、寝室のとばりの内でぐっすり寝込んだ。その男は何者？。まああえて、源氏名に含まれる亀の仲間ということで、想像してみるならば、ひょっとしていい人の名は六蔵さんっていうんじゃないかね。

起句。柳永『迎新春』「少年の人、往往にして奇遇あり」。「一宵話」、善生『智光の南に之くを送る。雨に値う』「又得たり一宵の話」。「情状」、『易』繫辞伝「是の故に鬼神の情状を知る」。韓愈『送窮文』「情状既に露わる。敢えて回避せざらん」。承句。「蓬莱」は、仙人が住むという伝説の島。渤海にあるという。白居易『長恨歌』「蓬莱宮中日月長し」。「蓬莱の夢」、南宋、高翥『毅斎鄭秘書道山客を領す』「山翁蓬莱の夢を作さず」。「巫山夢」と同様、男女のこの世ならぬ交わりを暗示する。「夢穏」、梅堯臣『銭駕部知卬州を送る』「夢穏やかにして刀州を過ぐ」。「閨幃帳」は見慣れぬ語だが、押韻するために無理をしたか。「閨幃」、『花間集』毛熙震・清平楽「愁いを含みて独り閨幃に倚る」。「幃帳」、白居易『弟を祭る文』「幃帳は収めんと欲す」。転句。「假（仮）」は、仮定の語。かりに、もし。「仮令」、「仮使」。『史記』管晏列伝「假し晏子をして而して在ら令めば」。「将」は「以」と同じ。平仄の関係で用いる。「将其類作相求」は、散文的な表現だが、要するに「以類推之（類推）」ということが言いたいのであろう。北宋、陸佃『埤雅』黿「此は其の類を以て之を求む」。元、李簡『学易記』「各の其の類を以て而して相い求む」。「作」字は余計な感じがする。平仄合わせのためか。「相求」、李白『楚江黄龍磯南に宴す。楊執戟楼を治む』「他日更に相い求めん」。結句。「果」は、「結果として予想通り・・・

となる」が基本義であるが、疑問の語気が付加して、「いったい、結局のところ・・・なのか」というニュアンスで使う場合が多い。『孟子』離婁下「果たして以て人に異なる有る乎」。「阿郎」は、既述。「六蔵」は、この詩のように去声で読むならば、「六臓」と同じで、人体の内蔵のことだが、ここに当てはまらぬ。平声すなわち「蔵する」という意味で読むならば、仏教語で、「亀六蔵」のこと。平仄の違いを無視したのであろう。『雑阿含経』巻四十三「亀虫見来たれば、則ち便ち六を蔵す」。亀が危険にあったとき、頭尾四足の六つをかくして、害を避けることから、人が才知を外に表さないで禍を避ける生き方に喩える。どういうわけか、この「蔵六」をひっくり返して「亀六蔵」という成語で用いられる。宋僧、恵洪『次韻して、葆光庵に題す』「孤坐すること枵然として亀六蔵（するがごとし）」。かくして、「亀」と「六蔵」のつながりは明白であるが、この「六蔵」が実際にいた亀二の愛人の実名なのか、それとも単なる戯れの仮構なのか、わからない。「六蔵」は、江戸時代に馬方の通称として用いられたそうだが（『国』）、関係があるかどうか。

大森惟中の評。

六蔵不是矢口渡恋阿舟人。

六蔵は是れ矢口の渡しの阿舟を恋する人ならず。

六蔵は、『矢口の渡し』に登場するお舟に横恋慕したあの悪者とは違うよね。『矢口渡』は、平賀源内作の人形浄瑠璃『神霊矢口渡』。矢口の渡守の娘、お舟と新田義岑の悲恋を描いた四段目がよく知られる。そのお舟に下人の六蔵が邪恋をしかけ、義岑を亡き者にしようとする。この評は「亀二」の本名の「舟引」に引かれた冗談口であろう。『神霊矢口渡』は作者の念頭にもあったと思われるが、詩の方はそれと関係なく作ったとみなして解した。

歌吉（ウタキチ）　佐々木歌女　　歌吉　佐々木歌女

(41) 花柳場中寄此身　　花柳　場中に　此の身を寄す
清歌妙舞不同倫　　清歌　妙舞　倫を同じくせず
請看浮薄狭斜裏　　請う看よ　浮薄　狭斜の裏
能解人情有幾人　　能く　人情を　解するは　幾人か有る

花柳の世界にこの身をよせたこのひとは、清らかな歌と美しい舞が人並みはずれて優れている。ああごらん、この軽薄な色街の中で、この人の気持ちを理解してくれる知己はどれほどいるだろうか。

起句。「花柳場中」、色街の、花や柳は、土手などに長細く連なるためか、縦横に広がりを持った「場」と結合しにくいようであるが、中国でも近世になると「花柳場」というようになったようである。明、劉璉『湖楽站に過ぎる』「昔年の花柳場」。清、于成龍『盗を弭め民を安んずる条約』「毎に無頼の棍徒に花柳場中に勾堕せ被る」。「寄此身」、白居易『対酒』五首其二「石火光中此の身を寄す」。承句。「清歌妙舞」は、劉希夷『代わりて白頭の翁を悲しむ』「清歌妙舞す落花の前」をそのまま用いる。「同倫」、『礼記』中庸「行いは倫を同じくす」。「倫」は、道またはともがら。「不同倫」は、要するに一般と格が違うことをいうのだろう。転句。「請看」は、注意喚起の語。李白『怨情』「請う看よ陳后の黄金屋」。「浮薄」、高適『淇上にて薛三掾に酬い、兼ねて郭少府に寄す』「時俗何ぞ浮薄なる」。「狭斜」は、色街の狭くて斜交いに走る通り。蕭賁『経過す狭斜の裏』。結句。類似の句、白居易『重ねて杏園を尋ぬ』「誰か多情を解して又独り来る」。また同じく白居易『楊柳枝詞』八首其五「若し多情を解して小小を尋ぬれば」。「小小」は南斉の名妓蘇小小のこと。この詩の雰囲気に近い。「人情」は、『礼記』礼運に「何をか人情と謂う。喜、怒、哀、懼、愛、悪、欲」とあるように、人の感情のこと。「解人情」は、歌吉の気持ちを理解してやることだろう。あるいは、人間らしい感情をもっている人、人情がよく分かる細やかな人という意味かも知れない。陳師道『彭祖楼』「黄鸝白鳥人情を解す」。「有幾人」、劉長卿『疲兵篇』「白首家に還るは幾人か有らん」

結句に傍点をつけて、大森惟中は眉批で、

真詣悟機。　　真に悟機に詣る。

という。訳。まことに悟りの境地に入った詩といえる。「真詣」二字だけでも、宗教の核心に到ること。南宋、薛季宣『兄の子象先公試を罷めて帰りて武林を知す。動静古風を成す』三首其一「黄庭真詣有り」。「悟機」は、仏教で悟りに到る契機のことか。真徳秀『黄氏貧楽斎に題す』二首其二「認めて元関悟機に透ると作す」。自らの不遇にあきらめる様を、皮肉に「悟機」とみなして、かえってこの妓女に同情を寄せていると思うがどうか。人がどう思おうとかまわず

に、ひたすら芸道に励むことが一種の悟りだという積極的な評価だろうか。

愛吉（アイキチ）　　愛吉（アイキチ）

自註　愛吉酡顔、媚靨可愛。○転結用俚歌語。　　自註　愛吉は酡顔、媚靨愛す可し。○転結は俚歌の語を用いる。

（42）嬌靨酡顔笑勧觴　　嬌靨　酡顔　笑いて觴を勧め
早収絃子入蘭房　　早くも　絃子を　収めて　蘭房に入る
似他情味大和柿　　他の　情味に　似たり　大和柿
一啖香甘不可忘　　一たび啖えば　香甘にして　忘る可からず

自註の「転結」は、もと「転絃」に作る。大森惟中の朱に従って「結」に改める。単なる誤字。自註の訳。愛吉は酒を飲むと顔がすぐに紅くなり、男心をそそるえくぼがかわいらしい。転句、結句は俗謡のことばを用いた。「靨」は字音かなづかいはエフ。「媚靨」、元稹『春六十韻』「酔いては円くす双の媚靨」。また劉言史『陳長史の妓に贈る』「深く媚靨を含みて朱絃裊たり」。「媚」は、こびるの意であろう。「酡顔」、李白『前に樽酒有り行』「美人酔わんと欲して朱顔酡たり」。白居易『諸客と空腹にて飲む』「酡顔已に丹を渥くす」。「可愛」、『書経』「愛す可きは君に非ずや」。日本語では、かわいいの意で用いるが、もともとは、敬愛を含めて、ひろく愛すべきことを指す。「俚歌」、劉禹錫『武陵書懐五十韻』「月を蹋みて俚歌喧し」。この詩の本歌たる「俚歌」の正体が不明なのが遺憾である。詩の後半にあるように、柿のうまさがいつまでも残ることを、女性（妓女？）の良さに掛けた内容の歌詞と思われるが、博雅の示教を俟ちたい。

愛らしいえくぼのある、酔いでほんのり紅くなった顔で、にこにことお酌を勧めたかと思うと、三味線をさっさと片付けて、閨の方に入っていく。愛吉の味わいに近い物といえば、あの大和柿。口をつけると芳しくて、一生忘れられない。

起句。「嬌靨」、「嬌」は甘えたようなかわいさ。盧仝『楼上女児曲』「我に嬌靨有り君を待ちて笑う」。「笑勧觴」、白居易『代りて詩を書く。一百韻。微之に寄す』「笑いて迂辛の酒を勧む」。承句。「早収」、王禹偁『伏日偶作』「早く餘俸を収めて帰田をトせん」。「絃子」また「弦子」は、中国の弦楽器三絃の別名。日本では三味線のこと。（『国』）楊維楨『張猩猩胡琴引』の序に「胡琴は南にありては第二絃子と為す」。李斗『揚州画舫録』虹橋録下「小唱は琵琶、絃子、月琴、檀板を以て、合わせ動かして而して歌う」。「蘭房」は、もと蘭の香るような高雅な部屋。阮籍『詠懐』二十三「逍遙として蘭房に晏す」。やがて、閨房を専ら指すようになった。潘岳『永逝を哀しむ文』「蘭房の兮繁華なるを委つ」。王績『妓を詠む』「窈窕として蘭房を出づ」、王維『白鸚鵡賦』「蘭房の妓女に狎る」は、この詩と同じく妓女の部屋。陳後主（陳叔宝）『采蓮曲』「且く試みに蘭房に入らん」。転句。「大和柿は他の情味に似たり」を倒置したのであろう。あるいは、「他の大和柿の情味に似たり」のつもりかもしれない。「似他」、「他」を「かれ」の意に使うのは俗語的、詞曲に見える。張翥『眉嫵』「怎ぞ他の今夜相い遇うに似ん」。「情味」は情趣、おもむき。劉劭『人物志』「情味に発す」。日本語の「人情味」のようにしみじみとした愛情のニュアンスをしばしば持つ。杜甫『病後王倚に過ぎりて飲み、贈る歌』「故人の情味は晩に誰にか似る」。「大和柿」は、御所柿ともいい、奈良県原産。四角くて平たい形。（『国』）結句。「一啖」、韓愈『無本師の范陽に帰るを送る』「両挙一噉を快くす」。「噉」は、「啖」に同じ。ここは、「ちょっとでも食べると」という感じ。「香甘」、梅堯臣『正月六日沈文通学士温柑を遺るに和す』「香甘冷たくして歯に熨す」。「不可忘」、杜甫『夔州歌』「武侯祠堂忘る可からず」。

大森惟中のこの詩に対する評。

熟柿紫爛、須戒放啖。

熟柿紫爛す、須く放啖を戒むべし。

熟柿が、紫色に爛れて腐りかけてる感じ。それがうまいんだが、食べ過ぎに注意。「熟柿」、韓愈『張道士を送る序』「霜天柿栗熟す」。「紫爛」、白居易『櫛沐して道友に寄すに和す』「晨燭朝服を照らして、紫爛復た朱殷」。范成大『良郷』「紫爛する山梨紅皺する棗」は、果実についていう。「須戒」、司空図『白菊』三首其一「詩中に慮り有るは猶お須く戒むべし」。「放啖」の語は見慣れぬが、「放」は放縦、欲しいままにするの意に違いない。存分に酔う意の「放酔」ならば、

白居易『初めて洛下に到りて閒遊す』「春を尋ねて放酔して粗豪を尚ぶ」。柿は、無論、青いよりは熟れた方が好ましいが、日本のようにぐじゅぐじゅになった過熟の柿を賞味することは、中国では一般的ではないと思う。同様に、日本の爛熟した遊廓文化は、成熟した年増の芸者に危険な魅力を見出す。それを背景に、大森惟中はこのようにふざけかかったのだろう。田舎のことだから、芸者といったってどうせ年増ばかりだろう、のめり込みなさんなというからかいの気分もあるか。

富（トミ）子　長澤阿辰　浪花之産　　富子　長澤阿辰　浪花之産

自註　富子幼来松江、夙有才色之名、傍能裁縫、転結故及。　自註　富子は幼くして松江に来り、夙に才色之名有り、傍た能く裁縫す、転結故に及ぶ。

（43）此地数年猶未帰　　此の地　数年　猶お未だ帰らず
宵宵紅涙漂閨幃　　宵宵　紅涙　閨幃を漂わす
憐君青女繡秋手　　憐む君　青女　秋を繡るの手
好為阿郎縫錦衣　　好し　阿郎の　為に　錦衣を縫うに

自註。富子は幼少に松江に来て、早くから、才色兼備で有名。一方、裁縫もプロの腕前。転句、結句はこの裁縫の達人であることにふれた。「夙」、早くより、従って、これまでずっと、平素。韓愈『扶風郡夫人墓誌銘』「夙に多誉有り」。「才色」、『後漢書』清河孝王慶伝「馬后楊の二女皆才色有るを聞き、迎えて而して之に訓う」。「傍」を、かたがたと読むのは、和風漢文。「且つ」とでもいうべきところ。「裁縫」、『周礼』天官・序官・縫人の鄭玄注「女工、女奴は裁縫を暁る者」。「故及」は既述。

富子は、この松江に来て早数年、いまだ大阪に帰れぬままだ。毎晩、紅い涙があふれ出て、閨のとばりをただよわすほどだという。ああすばらしい、秋の景色を縫いあげるという青女神のような裁縫の腕前。いい人のためにすてきな五色の錦を縫ってあげるがよい。

起句。「猶未帰」、張籍『臨江駅に宿す』「此の行猶未だ帰らず」。承句。「宵宵」は、「夜夜」とすべきを平仄のために変えた。しかし、詩語としてはあまり用いない。日本語の「よいよい」、「よなよな」を直訳したのか。「紅涙」は、実際に臙脂等の化粧を溶かして紅くそまった女性の涙。ここでは、血の涙という意味も籠めていよう。白居易『離別難詞』「覚えず別るる時紅涙尽く」。涙がとばりを「漂」わすとはあまりに大げさだが、これは、『書経』武成「血流れて杵を漂わす」を意識している。殷周革命における戦争のすさまじさを描写した文だが、孟子に「尽く書を信ずるは、書無きに如かず」と批判されたので有名。（『孟子』尽心下）「漂」字は、漂流、ただよわすの意では平声で読むが、それでは「漂閨幃」は下三連になってしまう。かといって、上声で読むと漂白、さらすの意になってここにそぐわない。「閨幃」は（40）に既出。転句。「憐」は、あわれむというよりは、感歎する気持ち。才能に恵まれながら不幸な富子に対するかわいそうだという気持ちも含んではいるだろう。王維『丘為の落第して江東に帰るを送る』「憐れむ君の意を得ざるを」。「青女」、『淮南子』「秋三月に至りて、・・・青女乃ち出でて、以て霜雪を降らす」。その注に「青女は天神、青霄玉女。霜雪を主る也」。杜甫『秋野』其の四「飛霜青女に任す」。日本ではさらに秋の女神として、紅葉等の景色をつかさどるとみなされている（『国』）。日本の伝説に基づいた語だから、「繍秋」は中国では用例がない。結句。「好」は、「よし」と先に訓ずるのが慣例だが、「・・・するのによい」、「・・・するのがよい」という意。但し、この詩は、訓読に従って、「よしさあ、縫ってあげなさい」と解釈すべきかも知れない。杜甫『行きて塩亭県に次す。・・・』「好し老夫の為に聴け」（私の話をきくがよい）。「阿郎」既出。「錦衣」、『詩経』秦風・終南「錦衣狐裘」。毛伝に「錦衣は、采色也」。李白『越中覧古』「義士家に還りて尽く錦衣」。

又

富子之情人、偶在藝州、故及。○厳島在藝州。

富子之情人は、偶ま藝州に在り、故に及ぶ。○厳島は藝州に在り。

（44）楼上夢驚蜀女魂

楼上　夢は驚く　蜀女の魂

杜鵑泣血欲黄昏
阿郎今夜何辺在
厳嶋祠前月一痕

杜鵑（とけん）泣血（きゅうけつ）し　黄昏（こうこん）ならんと欲（ほっ）す
阿郎（あろう）今夜（こんや）は　何（いず）れの辺（あた）りにか在（あ）る
厳嶋（いつくしま）祠前（しぜん）　月一痕（つきいっこん）

自註。富子の愛人は、たまたま安藝の国（広島県）にいたので、詩の中で言及した。厳島は安藝の国にある。怨みをのんで死んだ蜀女の魂の生まれ変わりといわれる杜鵑。その声で、二階で寝ていた女は夢から覚める。そして杜鵑のように、血を吐くようにむせび泣き続ける。気がつけばはやたそがれ。愛しいあなたは今夜どこに。厳島神社にもこの一筋の月がかかっていることだろう。

起句。「楼上」、中国でも日本でも妓楼は二階。「夢驚」、岑参『王著の淮西幕府に赴くを送る作』「客夢飛鴻に驚く」。「蜀女魂」、蜀の開国伝説では、望帝の魂が化して杜鵑となり、日夜悲しく鳴き続けたという。（『華陽国志』等）かくして、「蜀魂」、「蜀魄」は杜鵑の別称となった。李商隠『燕台・春』「蜀魂寂寞として伴有りて来たるや」。おなじく李商隠『遂州の蕭侍郎を哭す。二十四韻』「遺音蜀魄に和す」。女性が杜鵑に化したわけではないので実はここはおかしい。虞世南『北堂書鈔』「蜀女化石」の項に、秦から蜀に贈られた「五女」が「皆化して石と為る」という、『蜀記』の記事を載せる。また、『太平広記』「蚕女」の項に、蜀地の女が、馬との結婚の誓いを破ったことにより、蚕に変身し、後に蚕の神の馬頭娘として祀られたという『原化伝拾遺』の記事を載せる。これら、蜀の女性の変身に関わる悲劇的な故事を、意図的に混乱して用いて、妓女の恋の苦しみを表現したかったのだろう。富子が杜鵑の声に驚くという表面的な意味と、その富子自身があたかも悲しみに満ちた杜鵑の化身のようであるという見立てを、重ねあわせた句のようである。さらに、杜鵑の鳴き声が古来「不如帰去」（帰り去るに如かず）に比定されることから、故郷大阪にいつまでも帰れない、孤独な身の上を嘆く気持ちもこめられていようか。承句。「杜鵑泣血」は、「ないて血を吐くほととぎす」の俗諺及びそのもととなったと思われる白居易『琵琶行』「杜鵑啼血し猿哀鳴す」を意識するであろう。「泣血」とは、はげしい悲しみのため、泣いても声にならない状態。あたかも血が流れるときに音が出ないような、そのような振り絞るようなむせび泣き。

『易』屯「泣血漣如」。また『礼記』壇弓上「三年泣血」、その注に、「泣きて声無きこと、血の出づるが如きを言う」。とはいえ、杜鵑が血を吐くように泣くというつもりで、この句は作られているのだろう。杜鵑の口の中が紅いので、血を吐くようにみえるからだという説もある。「欲黄昏」、岑参『巴南の舟中。夜事を書く』「渡口黄昏ならんと欲す」。転句。「阿郎」既出。「何辺在」は、「何辺」が疑問詞なので、英文法同様に動詞の前に位置する。斉己『暮に岳麓寺に遊ぶ』「首を回らせば何れの辺りか是空地ならん」。結句。「月一痕」は、三日月を夜空につけられた傷痕とみなしているのだろう。楊万里『虞丞相挽詞』三首其一「凄涼月一痕」。

力長（リキチャウ）　比企阿充　松江藩士女　　力長　比企阿充　松江藩士の女

自註　七年流落、力長自語人者。○阿充為父母鬻技者。　自註　七年流落は、力長自ら人に語る者なり。○阿充は父母の為に技を鬻ぐ者なり。

(45) 桑滄之変独空傷　　桑滄　之変　独り空しく傷み
只喜双親猶在堂　　只だ喜ぶのみ　双親の　猶お堂に在るを
至孝佳人天未幸　　至孝の　佳人　天未だ幸いせず
七年流落滞斯郷　　七年　流落　斯の郷に滞る

自註。「七年流落」というのは、力長自身が人に語ったところである。おみつは、父母を養うために芸を売っている。「自語人」は文法的に破格かと思ったが、『法苑珠林』に「文本自ら人に語ると爾云う」の用例があった。「鬻技」、『荘子』逍遙遊「今一朝にして而して技を百金に鬻ぐ」。

桑畑が大海原に変わる転変の世の中、力長はひとりぼっちで心を痛めている。両親ともに健在であることだけが、唯一の喜びだ。孝行この上ない、この美人に、天は福を下して下さらぬのか。七年も、此の地であてどもない暮らしをしているのに。

起句。「桑滄之変」は、「滄海桑田」のこと。大海が桑畑に変じ、桑畑が大海に変じることで、時の長さというよりも、

世の中の有為転変を歎ずる成語。伝葛洪『神仙伝』王遠「麻姑自ら説いて云う、接侍以来、已に東海の三たび桑田と為るを見る」の故事に基づく。明、陳所聞『二犯傍粧台・月下続飲』「甚の的の桑滄更も変じて、両下を都べて断腸の猿と做し了んぬるを怕れん」。「独空傷」、張説『河上公』「弟子空しく情を傷つく」。陸機『門に車馬客有り行』「俛仰独り悲傷す」。承句。「只喜」、邵雍『喜歓吟』「只だ喜ぶ微醺を成すを」。「双親」、張九齢『穿心六害歌』「若し然く双親損害無きも、自身と妻子と切に刑を須いる」。「在堂」、「堂」は「北堂」で主婦の居室。したがって、「在堂」は母親の健在を示す。『春秋左氏伝』哀公二年「君夫人堂に在り」。ここは父親にも拡げて当てはめたか。転句。「至孝」、『礼記』祭義「至孝王に近し」。「幸」は、幸いをもたらすということから、君王等が寵愛すること。それを、天に応用したのだろう。『史記』項羽本紀「婦女幸いする所なし」。結句。「流落」は故郷を離れて、失意の日々を送ること。李白『韓荊州に与うる書』「白は隴西の布衣、楚漢に流落す」。劉禹錫『杏園聯句』「二十四年流落する者」。「滞斯郷」、柳宗元『柳州城楼に登りて漳汀封連四州に寄す』「猶お自ら音書一郷に滞る」。

鶴（ツル）子　増田於初　　鶴子　増田於初

（46）越王楼閣唱呉謳　　越王　楼閣　呉謳を唱う

声似九皐弄玉喉　　声は　九皐に　玉喉を弄するに　似たり

一自此君留此地　　一たび　此の君　此の地に留まりて　自り

人間此処小楊州　　人間　此の処　小楊州

越王の御殿で、呉の民謡を歌う。深い谷底で、すばらしい声を天までとどろかせる鶴のようだ。お前さんがこの松江に来たとたんに、人間世界の内に過ぎぬ此の地が小揚州のようになったよ。

起句。呉越の争いで、負けた呉の宮女が越にとらわれて宮殿で歌うかのような設定であるが、典拠を詳らかにしない。西施は越の出身だから、ここに該当はしまい。戊辰戦争もしくは西南戦争における敗軍の娘が、故郷を離れて妓女とならざるを得なかったような経緯が背景にあるか。「越王楼閣」、呉均『白浮鳩』「棲宿す越王楼」。「呉謳」、汪元量『湖州

歌』『歌喉宛転して呉謳を作す』。承句。「九皐」は、ぐねぐね曲がった沢。『詩経』小雅・鶴鳴「鶴は九皐に鳴き、声は野に聞こゆ」に基いており、「鶴」が暗に詠み込まれている。「玉喉」、李賀『洛姝真珠』『玉喉窱窱空光を排す』。玉鶴（33）に既出。梅堯臣『鳲鳩賦』『喉舌の辯を弄する能わずと雖も』。転句。「一自」ではじまる句、杜甫『復愁』十二首其五「一たび風塵起こりて自り」。「留此地」、宋之問『梁宣王挽詞』三首其三「君王此の地に留まる」。結句。「人間」は、人間世界。白居易『偶ま吟じて自ら慰む。兼ねて夢得に呈す』『人間此の会亦た応に稀なるべし』。「小楊州」、朱彝尊『雄州歌』四首其三「行人虚しく説く小揚州」。玉鶴（33）に既出。「楊」と「揚」は通用。

大森惟中は眉批で

与玉鶴同趣。要改作。　玉鶴と趣を同じくす。改作を要す。

玉鶴（33）の詩と、同工異曲なので、改作すべきだ、という。確かに、源氏名に関係づけるためとはいえ、双方とも鶴を詠み込み、歌の巧みなのをほめる。同じ尤韻だし、承句「弄玉喉」、結句「小楊州」は全く同じ。即興ならともかく、詩集ならば、当然編輯に意を用いるべきところ。強調のためとはいえ、「此」字の過剰な繰り返しも気になる。

素絲（シライト）　増田宇能女　　素絲　増田宇能女

（47）皓歯明眸傷此身　　皓歯　明眸　此の身を傷つけ
落花流水奈前因　　落花　流水　前因を奈んせん
素絲一縷長千尺　　素絲　一縷　長きこと千尺
繫得橋南橋北人　　繫ぎ得たり　橋南　橋北の人

きらきらした瞳に白い歯がこぼれる美貌に恵まれたことこそが、この私をきつい目に遭わせているのだ。苦界に沈んで、散った花が水に流れるような廃残の日々、前世からの宿業でどうしようもない。今や、私は、白い糸を一筋何千メートルも伸ばして、松江大橋の南からも北からも客をおびきよせては、虜にする魔性の蜘蛛女となりはててしまったのさ。

起句。杜甫『哀江頭』「明眸皓歯今何くにか在る」。「傷此身」は、『孝経』「身体髪膚、之を父母に受く。敢えて毀傷せざるは、孝の始まりなり」を意識するだろう。身体そのものが壊されたわけではないが、妓女になることが不孝の極み、人非人とみなされるわけだ。「落花流水」は、本来は晩春の景だが、事物が衰え行く形容としてしばしば用いられる。李羣玉『張舎人の秦練師の岑公山に帰るを送るに和し奉る』「落花流水離襟を思う」。貫休『偶ま作る。因りて山中の道侶を懐う』「落花流水青春を送る」。「前因」は、仏教では本来広く現象に先立つ原因を指すが、俗に「前世」の意で用いる。貫休『李祐道人に贈る』「渾て前因有るに似たり」。転句。『詩経』召南・羔羊「素糸五紽」。「白糸」ではなく、「素糸」を源氏名に当てたのは、かく由緒ただしい典拠をもつからであろう。「一縷」、白髪を詠んだ句であるが、韋荘『白を鑷す』「始めは糸一縷に因り、漸く雪千茎に至る」。「長千尺」、韓偓『呉郡懐古』「徒に労す鉄鎖長きこと千尺」。結句。「繋得」の「得」は助字。可能の語気があろう。司空図『楊柳枝寿盃詞』十八首其二「人心を繋ぎ得て別離するを免れしむ」。「橋南橋北人」、楊万里『舟呉江に泊まる』「橋南橋北銀濤渺たり」。高適『人日杜二拾遺に寄す』「媿づ爾東南西北の人」。

小蝶（コテウ）

(48) 花間比翼結春盟
思起東西別後情
舞翅翩翩一何重
娥眉顰顧露無声

小蝶
花間に　翼を比べて　春盟を結び
思い起こす　東西　別後の情
舞翅　翩翩として　一に何ぞ重き
娥眉は　顰顧するも　露は声無し

春、つがいの蝶々が羽を並べて、愛を誓いあった。やがて、二匹は東西に分かれていく。その後の気持ちを雌蝶はいつまでも思い出すのだ。いまひとりぼっちで、羽をひらつかせているが、何ともけだるそう。美しい眉（触角）をしかめても、露が答えるわけもなく、孤独な夜がふけていく。

「蝶」の正式な字音かなづかいは「テフ」。起句。男女の情を戯れる蝶に仮託する。「比翼」、王延寿『魯霊光殿賦』「五竜翼を比ぶ」。ここは、南方に棲息し、雌雄ともに翼が一つで、二羽並んで飛ぶという「比翼鳥」の伝説を意識する。(『爾雅』釈地)。「比翼鳥」は、仲むつまじき夫婦に喩える。白居易『長恨歌』「天に在りては願わくは比翼の鳥と作らん」。「結春盟」、『春秋左氏伝』「(桓公)十七年春黄平に盟う」の如く、「盟」は、本来、国家間の条約を指し、大仰な感があるが、戯曲では男女の間も含めた嘘偽りのない誓いにも用いられる。梁辰魚『浣紗記』「三年曾て盟を結ぶ」。承句は、謝朓『金谷聚』「車馬一たび東西すれば、別後今夕を思わん」を縮約。「思起」は、通常「思いは起こる」で、「思」は去声(仄声)の名詞として用いる。張説『朱使に和す』二首其二「思いは起こる南征の棹」。ただし、ここは平声の動詞として、「想起」と同意で用いているのだろう。転句。「舞翅翩翩」、李邕『鶴賦』「翅翩翩として而して勁逸たり」。『雍熙楽府』点絳唇「粉蝶舞翅」。また闘鶴鶉「蝶翅翩翩」。「一何」は、「何」の感歎の気持ちを強調した言い方。陶潜『郭主簿に和す』二首其一「懐古すること一に何ぞ深き」。「重」は、「かさなる」(平声)ではなく「おもい」(去声)。軽々と飛べないような沈んだ気持ち。結句。「娥眉」の「娥」は、「美しい」の意だが、この語、実は「蛾眉」が転じたもの。『詩経』衛風・碩人「螓首蛾眉」。蝶の触角と美女の眉を掛ける、凝ったレトリック。李白『怨情』「深く坐して娥眉を顰む」。「露無声」、張籍『秋山』「葉閒墜露声重重」のように、現実にはともかく、詩の世界においては、「露」は音を立ててしたたる。それが音を立てないという趣向。孤独感をより強調する。王建『十五夜望月杜郎中に寄す』「冷露は声無く桂花を湿す」。蘇軾『定恵院寓居。月夜偶ま出づ』「竹露声無く浩たること瀉ぐが如し」。しかし、露がここに出てくるのは唐突の感を否めない。或いは、和語の「つゆとして(男の)こえなし」のつもりかも知れない。

若柳(ワカヤキ)

(49) 葉如嚵眼含濃露
絲似愁腸遮澹烟
濯濯香薫春月柳

若柳
葉は嚵眼の如く濃露を含み
絲は愁腸に似て澹烟を遮る
濯濯として香は薫る春月の柳

多情顧影自相憐　　多情（たじょう）影（かげ）を顧（かえり）みて　自（みずか）ら相（あ）い憐（あわれ）む

大森惟中が改めているように、「嘘」字の旁が「虎」であったのを正した。「啼」と同字。「若」字に、もともと「わかい」の意はない。「弱冠」の「弱」と同音なので、日本語で相通じて用いるらしい。「嫩柳」とでも、当てるべき所。その葉は涙をためた目のような露を浮かべ、糸のように細く、恋の苦しみでずたずたになったはらわたのようになって、薄い靄をさえぎっている。しっとりとした香りただようなか、春のおぼろ月を浴びる柳。深い情の女の如く、自分の影を顧みて、孤独な悲しみにうち沈むのである。

起句は、白居易『楊柳枝詞』八首其七「葉は濃露を含みて啼眼の如し」の順序を変えただけ。承句は、起句と無理矢理対句にしたもので、柳糸をはらわたに喩えるのは雅とはいえないし、そもそも「絲」と起句の「葉」が重複。「遮」は、物理的に妨害するのであって、もやをさえぎる、あるいは、もやにさえぎられるというのにふさわしくない。朱慶餘『呉興新隄』『汀洲肯えて恨まんや柳糸の遮るを」。「澹烟」、白居易『江楼晩に景物の鮮奇を眺む。吟翫して篇を成す。水部張員外に寄す』。「澹烟踈雨斜陽を間つ」。転句は、『世説新語』容止「人有りて王恭の形茂なるを歎じて云う、濯濯たること春月の柳の如し」を下敷きにする。「濯濯」のニュアンスが取りにくいが、要するに柳の美しさを形容するにふさわしい擬態語。若々しい、人に秀でた優雅さの方向の意であろう。さらに、作者は「濯」字にひかれて、洗われたようなすがすがしさをこめているような気がする。喬知之『折楊柳』「憐れむ可し濯濯たる春の楊柳」。楊万里『写真を水鑑処士王温叔に贈る』「我如かず濯濯たる春月柳に」。庾信『画屏風を詠む詩』其十二「荷香水殿に薫る」。「薫」はくすべる感じ。「春月柳」の「春月」は旧暦一月から三月のことだという説もあるが、この詩では、結句の「影」につなげて、春のぼんやりとした月光を浴びる柳をイメージすべきだろう。結句。「顧影自憐」は典拠を絞ることはできないが慣用句。張九齢『鏡を照らして白髪を見る』「形影自ら相い憐む」。（昭明太子『夷則七月』「形影自ら憐れむ」。曹植『上責躬詩表』「形影相弔う」も類似）皮日休『死を潔くす』「影を顧みて兮自ら憐れむ」。

若梅（ワカウメ）

（50）素服淡粧纏此身
孤清潔白自無塵
春風未入趙郎夢
能耐雪霜有幾人

若梅
素服　淡粧　此の身に纏い
孤清　潔白　自ら塵無し
春風　未だ　趙郎の夢に　入らず
能く　雪霜に　耐ゆるは　幾人有りや

この身を飾るものといえば、質素な白い服に薄化粧のみ。独り清らかに身を保ち、後ろ暗いところがないから、自然とほこりも立たないのだ。春風はまだ梅好きの趙さんの夢に入ってこないのか。愛しきあの人にまだ会えぬ。梅の花の如く、雪や霜の厳しさにたえられる人は、わたしの他にこの世に何人いることでしょう。

「梅」の字は出てこないが、全句とも梅の故事や梅に対して用いるのにふさわしい詩語に満ち満ちている。この詩全体は、伝柳宗元『龍城録』「趙師雄酔いて梅花下に憩う」の段を下敷きにしている。隋代、趙師雄なる人が、羅浮山で、「一女子」の「淡粧素服」なるものと酒を飲んだが、それは夢であって、女子は梅の精であったという故事。起句は、この「淡粧素服」をそのまま用いる。「淡粧」といえば、蘇軾『湖上に飲む。初め晴れて後雨ふる』「淡粧濃抹総て相宜し」も意識していよう。また、范成大『漢卿舅の即事二絶に次韻す』「淡粧素服真に夢に成る」。「身に纏う」は詩語としては、通常好ましくないことがまとわりつくのを示すのが普通。既出。杜甫『丹青引』「終日坎壈其の身に纏う」。ここは、「素服」を身につける程度の意味。承句。「孤清」、孟浩然『楚竹吟。盧虔端公の湘絃怨に和せ見るるに酬ゆ』「孤清思い氛氳たり」。「潔白」、『楚辞』自悲「内に情の潔白を懐く」。「自無塵」、王維『盧員外象と崔処士興宗の林亭に過ぎる』「青苔日に厚くして自ずから塵無し」。すべて、清楚な白梅にふさわしい評価。転句。先の『龍城録』参照。まだ寒くて、春情を催すような風も吹かず、あの人と夢で出会うこともできないという気持ちか。「入夢」、李白『王七尉松滋を送る。陽台の雲を得たり』「嬋娟流れて入る襄王の夢」。また、杜甫『李白を夢みる』二首其一「故人我が夢に入る」。明、蕭冰厓『漕園古梅』「幾度の春風未だ詩に入らず」。結句も、寒さに耐える梅を、凛としたこの妓女に喩える。欧陽

修『紀徳陳情上致政太傅杜相公』二首其二「松柏凋み難く雪霜に耐ゆ」。「有幾人」は既出。

大森惟中の評。

淡粧孤潔。恐是老梅、非若梅。　淡粧孤潔。恐らくは是れ老梅ならん、若梅に非じ。

「淡粧」とか「孤清」とか「潔白」とかいうところを見ると、定めて年を経た梅であって若々しさに欠ける。若梅とは名ばかりの年増なのであろう。例によって、冗談口である。「孤潔」、鄭谷『前の水部賈員外嵩に寄す』「白鷺孤潔を同じくす」。

駒吉（コマキチ）　片山阿国　　駒吉　片山阿国

(51) 三年斯地寄斯軀　　三年　斯の地に　斯の軀を寄す
挙首長鳴低首吁　　首を挙げて　長鳴し　首を低れて吁く
一顧未曽逢伯楽　　一顧すら　未だ曽て　伯楽に逢わず
同槽伏櫪奈龍駒　　槽を同じくし　櫪に伏す　龍駒を奈んせん

本名の阿国といえば、出雲の阿国が想起されるが、詩の内容からは、外来の人であるようなので、関係はあるまい。原文では、「軀」字の旁が「巳」であったのを、評者、大森惟中が正している。単なる誤字であろう。今、これに従う。

これまで三年もの間、この松江に我が身を寄せて参りました。あたかも源氏名の「駒」の如く、頭を挙げて天を仰いでは長々と鳴き、頭を下げて伏し目に嘆声を吐くように、苦しい日々を過ごしております。名伯楽ともいうべき人のお眼鏡にはかなわず、誰もこの苦しみから救ってくれない。結果、駄馬と一緒にかいばおけに首を垂れるざま。あたら龍馬のような素質を持った私をどうしようもない。

起句。絶句で「斯」「此」を使う場合は、「他でもないこの」という強調のニュアンス。また、同字反復による、リズムの繰り返しを楽しむがごとくである。白居易『洛陽堰閒行』「七年此の地にて閒人と作る」。「寄斯軀」、薛能『昇平楽』

十首其七「此に於いて微躯を寄す」。承句は、明らかに、李白『静夜思』「頭を挙げて明月を望み、頭を低れて故郷を思う」を換骨奪胎している。平仄の関係で、「頭」を「首」に変えた。「首」は「頸」と違って、頭全体を指す。「挙首」、同じく李白『感遇』「首を挙ぐ白日の間」。「低首」、王勃『人の為に蜀城の父老に与うる書』「首を低れて眉を俛す」。「青雲」、曹植『闘鶏』「長鳴青雲に入る」。転句。「未曽逢伯楽一顧」（未だ曾て伯楽の一顧に逢わず）とあるべきところを、語順を変えた、やや無理な言い方。「一たび顧みれば（振り返ってみると）」とは読めないだろう。「伯楽」は、戦国時代（秦）の馬相を見る達人。優れた素質の馬が塩の車を引かされて疲れ果てていたところに、「伯楽之に遭い」て、世話をした。馬は「是に於いて俛して而して噴き、仰ぎて而して鳴く。声は天に達」して恢復した。なぜなら、「彼伯楽の己を知るを見ればなり」。（『戦国策』楚策四）この故事を転じて、駒吉がよき旦那（或いは雇い主）に恵まれないことを詠んでいるのであろう。謝朓『王主簿季哲の怨情に和す』「生平一顧重し」。李商隠『河東公に献ずる啓』二首其一「徒だ伯楽に逢いて而して鳴く」。司馬光『馬病』「未だ伯楽に逢う能わず」。結句。「伏櫪」、曹操『碣石篇』「老驥櫪に伏す」。李白『崔諮議に贈る』「素より櫪に伏するの駒に非ず」。「同槽」といえば、曹操が、三匹の馬が一つの槽で食べているのを夢みた故事。この夢は、司馬氏が三代かけて、曹氏に取って代わることを暗示している。（『晋書』宣帝紀）いわゆる「三馬同槽」。この詩にはそぐわない故事だが、曹操にちなんで、語を流用した。「奈」は、（47）で既述。「龍駒」、李白『永王東巡歌』十一首其七「征帆一一龍駒を引く」。

本訳注は
・2007-2009年度　山陰地域古典文学資料の公開に関するプロジェクト
代表者　蘆田　耕一
・2008-2009年度　歴史・文化資源を活かした「地域まるごとミュージアム」化実践プロジェクト
～島根大学旧奥谷宿舎を取り巻く「ひと・まち・なりわい」をキーワードにして～
代表者　会下　和宏　田中　則雄　竹永　三男

による成果の一部である。